者不少候、夷俗之事は、東遊雜記に詳出候得ば、不贅候、乍去奥地之方は、夷人之寶と唱候雜器も多く、人物も逞しく、ウラカワより只夷人大低眉毛兩分、穀食故にも候歟、エリモより奥は眉毛相連りて鬚に至る、盡く魚食故にも候歟、其風俗其語頗相違にて、奥蝦夷之方は一切作物を不存、口蝦夷之方は粟稗大小豆作附相貯へ、粟をモンジロ、稗をビヤバと唱へ、昔義經此土へ來り給ゐし時、播種を教へられ候よし申傳へ、已にサルムカワに、義經之故居とて、夷人幣束を立る處有之候、六月廿三日、アツケシ出立、ビバセ、ヲツケシを經て、子モロに至る、此地はキイタツフ領と唱へ、北はクナジリ島、東はノツカマツフの出崎、西はメナシ夷言に東の方といふ事ニシベツよりシレトコ迄凡七八日路、子モロは去子年魯西亞人伊勢之漂民を送り、渡來候地にて、今尚其故跡殘り有之候、夫より海上凡十七八里、クナジリ島、此島周廻百里に不過といへども、名山奇石實に天造之妙、先セヽキといへるに、海中より温泉沸騰し、クサリナといふは自然方石、幅凡六七寸、長凡一丈半、或一丈ほどなるが、纍々と相疊みて、鎧の草摺のごとく、其傍に冑形之石あり、又其傍上に方石長二三尺なるに、井幹（ゲタ）を組し凡六七あり、平地は方石の小口、波浪に磨して龜甲のごとく、奇々妙々不可言、夷人は昔義經此地へ甲冑を置給ひしが、化して石となり、其井幹は熊を商なふ處と云傳ふ、不佞は孔明魚腹浦八陣石のごとく、籏旗を建給ひしか、又六花招之隊悟を被試候遺跡かとも存候、夫よりイエンシユマ紫黑之角石、其上頭は種々之像をなし候が、二町ばかりがほど屏風の如くに立並び、海水と相映じて如畫、ヲタチツフといふ砂山は、夏中穿こと凡一二尺なれば、砂下皆々雪にて、是も義經の船化して砂となる由言傳ふ、チヤチヤスフリといふは、高三四里分、高山絶頂に湖あり、湖中に高山秀拔して雲際に聳へ、湖之水島の西へ流れて瀑布となるを、ショフケベといふ、東へ流れて大川となるをヲンチベツといふ、此山メナシよりヱトロ迄を一望して、實に海内第一之神山ともいふべきか、此外ルヨウベツの紋巖、バウチの沸湯の如き奇絶無雙、故に不佞クナ